吃音者の怒りを！

—障害者の自立と解放—

吃音者に怒りが全く無かった訳ではない、例えば小学生や中学生の時、「どもり！」とからかわれ追い掛け回したという話を耳にしたことがある。吃音者のガキ大将もかなりいたらしい。けれども成長していくなかで、「どもりは悪いもの、劣ったもの」と意識を身につける中で、怒りを消失していく、というのが一般的パターンである。

そして怒りを持つこと自体が、「おとなげない」として否定的に扱われる。

けれども、差別に対する純粋な怒りが何故否定されねばならないのだろうか？

障害者には二つの形の役割期待が向けられる。一つは「健常者の迷惑にならないように社会の片すみで生きよ！」という内容の、差別を問題にする人々には誰にでも差別ととらえられることである。そしてもう一つは、「障害に負けないで社会参加しなさい」ということである。そしてこの形を変えた差別が差別としてとらえられないことが障害者の運動に混乱をもたらす。(私達は前者を「絶対的排除の形態」後者を「相対的排除の形態」と呼んで、とりわけとらえにくい後者の差別性についてこれまで何度も語ってきた)

前者には反差別として障害者の「解放(*)」が語られて来、歴史は浅いにせよ運動の積み重ねがある、しかし後者についてはほとんど語られていないに等しい。よく障害者の「自立(*)」ということが語られる。吃音者運動においてもセルフ・ヘルプとして語られることに通じることである。それが障害者サイドで自分のことを自分で決定していくという意味で語られることの意味において、それは障害者が自己決定出来ない状況があって、それに拮抗して獲得していくこととしては、前者に通じることである。それは吉本隆明の「自立」の概念にも通じている。状況からの自立というのは闘いを意味する。障害者の自立とは、自他の「健常者幻想」＝健常者の価値観との闘いと、それからの自立を意味する。けれどもその自立ということを健常者が使う場合にはたびたび全くの逆のことを意味している。

それは身辺自立として、自分のことは自分でやるべきだ、という標準的人間像を押し付け、障害者がいかに健常者に近付きえるか、近づくべきだという論理に基づき、障害者にそれを迫ることとしてある。

そしてそのような世界観の押し付けの中で、さまざまな障害に負けないで努力する障害者の美談物語りが語られて来た。昔、「典子は今」というサリドマイドの障害者を主人公にした映画が作られた。その映画を見ていて危うさを感じていた。本人の意に反してであるが、彼女が頑張っているのだから、やればできるのだから、という論理が障害者に押し付けられていく危うさを感じたのである。

そのことは障害者だけの問題ではない。男性と女性の非対称性のワク組みをそのままにして、努力すれば、気の持ちかたを変えれば、女も社会の中で受け入れられるのだ、という女性差別の問題においても同様であり、初期のフェミニズムはそのようなワク組みに乗って男と同等の社会参加を目指した。そしてそのような考えかたが女性の間に分断をもた

らし、そして「男並に働き」「男に近づく」ことによって社会参加した女性が他の女性の批判者抑圧者となって現れた（現在のフェミニズムは未整理とは言え、家事への参加等を通して新しい価値観の創出へ男を巻き込んで行くと変わって来ている）。

最も分かり易い問題は貧乏人も努力すれば金持ちになれるのだという論理の欺瞞性である。そもそも出発点において差があるということが差別であり、そもそも金持ちになれるのはシステムとして僅かしかないし、わずかな可能性を求めてで人を踏み付けるようにしてはい上がることが素晴らしいことなのであろうか、という問題である。そもそも「差異」があるから差別があるのではない、社会システムが差別的システムとしてあるがゆえに、「差異」を産出するのだ。

努力することが個人的努力に止まる限り、それは他の障害者—吃音者への抑圧の論理として現れる。我々はこのことを過去の歴史から痛みをもってとらえかえさねばならない。

いままでの吃音者運動もそのようなとられの中にあつた。

吃音者は最初吃音を治すことにとらわれていた。そこから90度転換し吃音の克服ということが語られてきた。これらはいずれにしても障害者への役割期待とその遂行の一つの形態にすぎない（その役割期待に応じて、吃音者差別は存在するのか、という論理まで生まれてきている）。だが、この吃音（障害）に負けないで、「克服」しろ—しようという役割期待—遂行も、「どもりは悪いもの、劣ったもの」という論拠からでてきていて、吃音者を取り巻く状況の変革を抜きにした、吃音者を抑圧する論理であり、それが差別ではない、差別を受け入れることではないと何故いえるのだろうか？（セルフ・ヘルプの理念だけでなく、森田療法の「あるがままに受け入れる」ということが一つの吃音者に役割期待として向けられる。これはこれらのことを脱していると反論する人がいるかもしれない。しかし、これは「療法」にすぎない。差別への観点を抜きにして、気持ちの持ちかたを変えれば、状況が変わるという情況錯認であり、いずれにしても状況に対する働きかけのないところで、「障害」を否定的にとらえる論拠のワケ内にあるのではないだろうか）

この論理のワナは、自立とはなにか、何故障害者が自立しえていない状況があるのか、という問題設定をすれば明らかになる。

自立の前に、自立の基底に、差別と闘うことが前提となるのではないだろうか、そのことを抜きにして、自立を語るとき、自立は健常者のいう意味での自立、一方で絶対的排除されている部分を切り捨てつつ、部分的に健常者の作り上げた社会にいかに組み込んで貰うかという、個の努力が総体の吃音者—障害者を抑圧する論理にしかならない。

別に健常者が皆敵だと語る積もりはない。けれども健常者の作り上げた社会の論理に社会化ということで相対的排除として、組み込まれた歴史をとらえ返しておかねばならない。そして差別者と被差別者の間には溝があるという現実から出発するしかないのではないだろうか。障害者の社会参加ということを全面的に否定するのではない。健常者と別の障害者の社会を作ろうというのではない。だが被差別の状況の変革を抜きにして、社会参加を個人的努力で獲得したとしても非対称的被差別の状況は変わりはない。個的な努力は

永遠の循環運動でしかなく、運動としては無でしかない。個人的努力ではなく吃音者総体の利害、普遍的利害の問題として社会参加を勝ち取る、否、健常者の価値観—差別的価値観の中への組み込まれではなく、共に生きる健常者との共同作業として新しい社会を作り出す作業に踏み込む時ではないだろうか

吃音者運動で私達がどうしても理解できないことがある。吃音者の問題を吃音者個人の気持ちの持ちかたを変えるということに突き詰めていくことである。そのことを吃音者個人が出すのは個の価値観の違いの問題であるが、吃音者の集まりが打ち出す意味はない。吃音者の問題が個人の問題なら、吃音者が集まりを作る意味はない。たとえ無自覚としても、吃音者の集まりの無前提的意義はその被差別の共同性としてあるのではないだろうかそのことをとらえ返して方針化する必要があるのではないだろうか

さまなければ、吃音者の集まりは無自覚的な被差別の共同性において継続していくとしても、積極的な存在意義は見いだせないのではないだろうか

話を最初の怒りの話に戻そう！

確かにその怒りが個の段階（即自的段階）で発せられることにとどまっている限り、問題の真の解決にはならない、とは言いえる。だが、怒り自体が否定されることではない。時々怒りを持ち続けている被差別者に会うことがある、そしてかの人、怒りと同じにあたたかさを有している。かの人、自分が差別されることは、差別する当人を逆にかわいそうな人だと許せる。けれども自分の仲間のこととしては決して許せない。吃音者の問題が私個人だけの問題で、かつ他の問題と関係がないとしたら許せる。しかしそのようなこととしてはない以上許せないのだ、という心境にあるのではないだろうか。吃音者には怒りが無い、怒りを消失させられたというだけではない。「自分」ということしかない。吃音者総体という観点が欠落している。

吃音者ももう、吃音者総体、そして他の障害者、他の被差別者とのつながりという観点を組み込んで語るべき時ではないだろうか。

もう色々形を変えた個人的な努力としての「頑張って！」なんて止めましょう！吃音者の怒りを怒りとして引き出し、それを運動として作り出していく新しい運動に踏み出す時ではないだろうか

（註）

* 自立

自立というのは認識論的には当事者意識の主体性の問題で、第三者的にみれば、社会から共同主観性から超絶するという意味で自立しえるなどということは有り得ようもない、古い共同主観的意識と新しく生み出す共同主観的意識のせめぎあいとして自立の問題があるのではないだろうか

* 解放

解放というのは本来の人間ということを設定している。初期マルクスの用語で言えば疎外ということの止揚として起てられることである。ただマルクスが疎外論から物象化論へ移行したように、そして本来の人間を設定することの危うさを考える時、解放という概念を用いることを再考する必要があるだろう。